
愛し愛され、救われて。

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛し愛され、救われて。

【NZコード】

N5034T

【作者名】

てんのすけ

【あらすじ】

進学した学校に嫌気が差していた主人公。唯一の救いは、優しい保健の先生だけだった。

(繪畫)

まいじへお願こしあす。

なんか知らんけど今、ものすごい楽しい。

今まで学校に行くのがとても憂鬱だったのに、今はそんなことが全然ない。

どうしてなのか、そう考えるとつい当たるのは一つしかない。

俺は恋をしている。

自分でもバカだなあつて思つくりいまつすぐな気持ちだ。

どうしようもなく、彼のことばかり考えている。

そして、考へても考へてもどうしようもないから、彼女がいる学校に行く。

彼女の姿を見ると、胸が高鳴る。

彼女の声を聞くと、自然と微笑んでしまう。

彼女に微笑みかけられると、彼女の持つ優しさに包まれたような気がして、ものすごく安心する。

もう、アホみたいに彼女に夢中だ。

だから俺は今日も、彼女の姿を見るために薄いドアを開けた。

「先生、いる？」

「どうしたの、恭也。具合が悪いのかな？」

先生はいつものように文庫本を読みながら、微笑んでくれた。いつもいつも文庫本を読んでいる先生。いつ仕事をするんだろう。「今日も先生に会いに来た。ヒマなら相手してよ？」

俺はいつも座る席に腰を下ろした。

先生が座る席の向かい側の席。そこが俺の定位置だ。

「会いに来てくれるのは嬉しいんだけどね、お友達とは大丈夫なの？」

先生は苦笑しながら、俺に聞いてくる。

「大丈夫。それなりにやつてるから。やっぱり迷惑なの？ 先生は？」

そりだつたら会いに来るのは控えよう、それなりに。

「ううん。元気になつた恭也が今でも会いに来てくれるのはすゞく

嬉しい」

先生が微笑みながらそう言つてくれたので、俺はホッと胸をなでおろした。

だつて、迷惑に思われてたらきっと、俺の気持ちは未来永劫届くことはないから。

「だつたら、いいじゃん。俺、先生のそば、スゲー好きなんだ。だからさ、いさせてよ。なるべくさ？」

俺は途中から小さい声になってしまった。

恥ずかしかつた。

好きな人の前で、意味が違くても『好き』って言つのは恥ずかしい。

恥ずかしさのあまり突つ伏した俺を、先生はクスッと笑つて頭をなでた。

「恭也、なんて言つたの？」

突つ伏しながら横目がちに先生の顔を盗み見る。

思いつきりニヤついていた。

先生は絶対分かつてる。なんだよ、あんなに恥ずかしかつたのに

……。

「教えない」

俺は再び突つ伏して、顔を見せないように隠した。

俺が顔を隠すと、先生は椅子を立つたようだつた。先生が座つていたパイプ椅子から立ち上がつたときに聞こえてくる、ギシッとう独特の音が鳴つたからだ。

そして、先生は俺の近くに來たようだ。

先生の柔らかい香りが俺の近くで感じられたから。

「……！」

そして、先生は俺の耳にふつと、息を吹きかけてきたのだ。

俺はびっくりして先生のほうを振り向いた。

「何すんのぞ」

「恭也は可愛いね。ホント、そんな可愛い顔をするからだよ？　こんなに苛めたくなるのは」

先生はクスクス笑いながら俺の頬に触れた。

「なんで、可愛いと苛めるんだよ。優しくしろよ、先生」

俺はほんの少しだけ、意地悪な先生にいらっしゃったから睨んでやつた。

すると先生はさらに笑みを深くした。

「優しくされたかつたら、まず、その苛めたくなる可愛い顔をやめなさい？」

先生は俺の顎をクイッと上げて自分の唇と俺の唇を重ねた。

ああ、なんでこの人のキスは強引なのに、こんなにも優しいんだ……。

俺は目を閉じながら、先生の唇越しに伝わってくる優しさに身を委ねた。

俺、千歳恭也が先生に身も心もぞっこになつたのは、先生に助けられた事がきっかけだと俺自身は思つてゐる。

俺が通う学校は、世間で言う進学校というやつで、成績のいいやつが絶対というところだった。

きっと、他の学校はそうでもないのだろうが、俺の入学した学校は生徒同士を競争させることで育っていく、という色が強く、テストの結果は小テストだろうが大手予備校主催の模試だろうが、全て張り出され、順位によつてクラスが分けられたりする。

自分の実力以上の学校にまぐれで入学してしまつた俺は、最初のテストで当然のように低い順位を叩き出し、すぐに落ちこぼれの烙印を押された。

最悪なのは、俺の席の隣には必ず成績優秀なやつがやつて来る」とだった。

成績が低いやつは、いいやつにサポートしてもらひ、といひことなのだろうが、俺の場合はまるで違ったのだ。

小テストのたびに俺の答案を見てバカにしたように笑う顔、調子が悪く思つように点数が伸びない時は俺に点数を聞いて、一喜一憂する。

そんな扱いの俺だから当然の如く仲間外れにされ、会話には入れてもらえないし、それをどうにかしようと努力をしてもイマイチ結果に現れてこない。

またそれをどうにかしようと毎日、毎日寝る間も惜しんで勉強した。

それでも、全く彼らには追いつけない。

俺の中で、ドンドンどす黒い塊がどんどんたまつていった。

そんな俺にトドメを刺したのは期末考査の結果発表だった。

勉強すればするほど俺の成績は下がりまくり、ついには最下位になつた。

掲示板を見て俺は愕然とした。

どうしてだよ、どうして俺はこんなにできないんだ。

なんで思つよくならねえんだよ！－

激情に任せて、掲示板に思い切り拳を叩きつけた。

掲示板は拳の形にへこみ、あまりの痛みに拳を見てみると赤く血が滲んでいた。

「あーあ。派手にやつちやつたねえ。大丈夫？　おてて」

突然の軽すぎる声だった。俺は殺意に近い感情を抱きながらも振り返った。

そこには、よく生徒の会話の中で出てくる美人で人気な保健の先生が立っていた。

「……何ですか？」

一応、年上なので敬語の俺。

「ああ、もつり！ 固いなあ！ 言わなかつたつけ？ 私にはため口でよろじく～つてやー。」

んなこと知らねえよ。初めて聞いたつづーの、そんな話。

「はあ……」

とりあえず相槌を打つた俺に、先生は口せー口せー口しながらも田が笑つて無い状態で詰め寄つてきた。

「ああ、つざいったらないわね。ほら、じつちきなさい。その血だらけの手、何とかしなきやダメでしじう？」

気がつくと俺の手は先ほど掲示板へのパンチで血だらけになつていた。俺の制服の裾を握つてずんずんと前に歩いていく先生。俺はされるがままだつた。

保健室につくと、先生は俺の手当てを手際よく始めた。

「……手際、いいんですね」

俺は聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「当り前でしょ、保健室の先生よ、私」

先生は何言つてんだ、コイツと言わんばかりに怪訝そうな表情で俺を見た。

俺は目線をそらし、されるがままに手当てを受けた。

それにしても、この先生は本当に保健室の先生なのか？

学生気分丸出しなギャルっぽい服装の上に白衣を羽織つているだけの恰好。

どう見てもコスプレ趣味のギャルにしか見えない。先生なんだし、もっと落ち着いた服装をするべきじゃないのか？

「保健室の先生に見えない、そう思つてんの？」

「……！」

「あらあ、図星？ 先生、ちゅうつと勘がいいのよね。でも私はそれでいいと思うわ。保健室の先生に見えなくてね。服装とか実績とかじゃないでしょ？ 大事なのはさ。保健の先生としての意識、行動、職務を全うできれば十分じやない」

先生は俺の手当てを終え、備え付けの冷蔵庫から麦茶を取り出し、

「はい。だから、あなたも成績がどんなに悪くてもいいと思うのよね。学生の本分はなにも勉強だけってわけじゃないし。学生時代という短い期間でしか学べないことってたくさんあるから。それに世間一般で言われてる勉強つてやつも順位のためじゃなくて、自分を高めるためにするものでしよう?」

先生があまりにも簡単に言うから、俺は麦茶を机に力強く置いて怒鳴った。

「簡単に言うなよ! この学校は成績が全てなんだよ! だから、俺は成績が悪いから弾かれまくりだよ! アンタは人気があるから一人じゃないもんな? 俺はずっと一人だよ! この気持ち、アンタには分かるのかよ!」

先生はっこりと俺に微笑みかけると近づいてきて、ふわりと俺を優しく抱きしめた。

「それがあなたの本音なの? あなたはさみしかったの?」

俺は突然のこと驚いて動けなかつた。

「気付いてあげられなくてごめんね。もう、大丈夫よ。私がいるから」

先生の声はとても優しくて、どうしようもなく俺に響いてきた。俺は学校じゅくについて、こんなに優しい言葉をかけられたことが一度もなかつた。

「なんだよ、それ」

「なんで、アンタはそんなに優しい言葉をかけてくれるんだ。」

「私、いつもここにいるから。だから、来なさい。恭也」

なんで俺の名前を知っていたのか、どうして声に懐かしさを感じたのかなんかどうでもよかつた。

今は、彼女の優しさが俺の中に染みわたつた。

それからといふもの、俺は先生に保健室までよく会いに行つた。先生は俺に麦茶を出して、他愛のない話に付き合ってくれる。それが日常になりつつあったある日、俺は気付いた。

俺、最近楽しいよな。

どんなに見下されても、どんなに結果が出なくても、先生と話せばすつきりするし、幸せな気持ちになれた。

先生に会いに行くために学校に俺は行つてゐるかも知れない、そう気付いた時だった。

俺がいつものように保健室に行くと、先生は他の生徒と話をしていた。

確か、アイツは成績もよくて顔もイイといつ評判のやつじゃなかつたつけ？

そいつは親しげに先生と話していく、時折先生の髪や肩になられしく触れていた。

俺はそいつが先生に触れるたび、言ひようのない怒りに支配された。

どうしてこんなにもムカつく？

俺はそいつがいるにも関わらず、ドアを開けた。

「先生、腹、痛いんだけど」

「あ、恭也じやん。どうした？、腹痛とかウソだろ～」「

「ウソじゃないから。いいから、先生、面倒見てよ」

自分でも引いてしまったくらいの態度だった。それでも先生はしうがないなあ、と軽く息を吐いて俺の方へ来た。

「ちょ、お前何言つてんの？ キチガイつてやつ？ どこまでもバ力なやつだよな、お前つてぞ」

イケメン野郎は俺にバカにしたような視線を送つてくる。口元が嫌な感じに歪んでいるのがどうしようもなく腹立たしい。

「坂本君。そんな人を貶めるようなこと言う人、私嫌いかも～」

「え、ちょ、先生！？」

「とりま、病人来ちゃつたからさ、早いトコ出てつてくれる~？」

先生は二口二口と笑顔を絶やさずにイケメン野郎を保健室の外まで押し出した。

ドア越しになにかイケメン野郎が嫌みつたらしくほざいていたが関係ない。

先生は俺のことを優先したんだから。

しばらくして、俺と先生は一人きりになつた。

「どうしたの？ 本当は」

一応、腹痛ということで貫き通した俺はベッドで寝ていた。

「先生、俺、おかしいのかもしれない」

「どこが？」

「俺、先生がさつきの野郎と話してるのを見て、ものすつごく頭にきたんだ。どうしようもなくてさ、胸が痛くなつてさ、俺……」「俺が言い終わる前に、先生は俺の唇に自分の唇を重ねてきた。

「せん、せい？」

突然のキスに驚きを隠せなかつた。

「どう？ 治つた？ 胸、痛かつたんでしきう？」

先生は笑顔で俺に言つた。少し赤みががつたその笑顔はとても魅力的だつた。

「まだ、痛い、かも」

俺は胸の痛み、よりもまたしたいという欲求の方が強かつた。そして、俺がそう言えば先生はキスしてくれると思った。

だって、先生は保健室の先生だから。

生徒の苦しみを取り除くのが仕事だから。

先生はしかたないなあ、という感じで苦笑すると、俺に再び唇を重ねた。

先生と出会つて初めての夏のことだった。

俺はクラスで信じられないことを聞いた。

「保健室の香田先生が今期で退職することになった」
「ホームルームで未だに名前すら覚えていない担任がそう、言つた
のだ。

俺は愕然とした。

先生がいなくなるって、どういうことだよ……！

いつもここにいるからって、言つてくれたじゃないか。

俺は、先生に話を聞くためにホームルームが終わつてからすぐ、
保健室に走った。

先生はいつもと変わらずに、ギャルっぽい格好に白衣を羽織つて、
文庫本を読んでいた。

「どうということだよ」

「聞いちやつたんだあ～」

俺の第一声を予想していたかのようになに余裕を持つて答える先生。
それと正反対に余裕がない俺は声が大きくなる。

「どうしてだよ！　どうして先生、やめちやうんだよー。」

俺の言葉に先生は冷たく言つた。

「それはなんであなたに言わなくちゃいけないの？　あなたに関係
ないでしょ？」

「そ、それは」

確かに俺には関係ない。俺は先生とは生徒と教師という立場でし
かないのだから。

恋人とか、そんな甘い関係ではない。

キスはするけど、恋人じゃない。

だって、俺は先生からはつきりと拒絶されるのが怖くて、そういう話題は避けていたから。

先生と過ごす今が大事だったから。

でもそれが壊れようとしている。

「もう、あなたには友達がいるでしょう？ 私はあなたの孤独をどうにかした。もう、いいでしょ？」

「嫌だ！ 僕は先生のことが……」

またしても僕は最後まで言葉が紡げなかつた。

先生は俺のネクタイを強引に引っ張り、キスして止めたからだ。「私はね、ただ遊んでたのよ。アンタで。さみしがりの年下なんて甘くすればホイホイついてくる。本当、楽しかつたわ」

「先生……」

「ウソ、つかないでください。」

「だつたらどうして、そんなに泣きそうな顔で言つんですか。どうして、そんなに声が震えているんですか。」

「どうして、こんなに優しいキスをしておいてそんなことを言つんですか。」

「先生、本音言つてよ。頼むから。俺、先生がいなくなるなんて嫌だよ」

「だから、言つてるでしょ？」
「私は……」

「ウソだ！ 先生、ならどうして先生は泣いてるんだよ！？」

先生は泣いていた。

いつも笑いかけてくれた綺麗な顔を悲しみでゆがめていた。
俺はこんな先生の顔を見たくない。

笑つていてほしい。

「ウソ、つくのやめよつよ？ ホントはどうしたいんだよ、佳保」
俺は初めて先生の下の名前で呼んだ。そして、優しく先生を抱きしめる。絶対に離したくない、そう強く願いながら。

「好きよ。好きよ！ 好きなのよ！ 恭也のことが。ずっと、ずっとよ？ どうして気付いてくれないの？ 好きなら私をもつとじばりつけなさいよ！ もつと、私だけを考えなさいよ！」

先生は、いや、佳保は俺に思い切り抱きついてきた。

佳保は今にも壊れそなぐらい、もうくて、柔らかかった。

いつか、佳保に抱きしめられて救われたように、優しく。

今度は俺が佳保を救うんだ。

お互に落ち着いてから、佳保は話してくれた。

佳保は俺が中学生のころ、教育実習で俺の中学校に来ていたこと。そこで、今現在のように上手くいかず失敗ばかりだったこと。そんな自信を無くしかけていたときに俺と出会ったらしい。そして、俺は失敗を繰り返す彼女にこう言ったそうだ。

「先生、もつと笑ってよ。先生、綺麗なんだからさ」そこで、佳保は気付いたらしい。

保健室の先生は生徒を不安にしてはいけない。

生徒を優しく包まなくてはいけないのだ、と。

きっと、自分は笑えないのを指摘されるぐらい余裕がなかつたのだろう、と。

そして、俺をよく見てくれている子だなあ、と感じたらしい。「それからなんだ。実習期間は、ずっと君を目で追いかけてね。ほんと、何年ぶりだろうね？ 気になる男の子を目で追いかけるなんて」

佳保は保健室のベッドに腰をかけて照れ交じりに笑つた。

「それで？」

「この学校で採用されて、しばらくしてから君が入学してきた。嬉しかつたんだ。君がやつてくるって知った時は」

佳保は隣に座っている俺の手を握つた。

「でもね、探しても君はいなくて。ようやつと見つけた時の君は、あの時の田をしてなかつた。ものすごく虚ろな田。きっと、実習の時の私はあんな田をしていたんだろうな、って。見てて悲しくなつちやつた」

「そんなひどかったんだ」

俺は苦笑した。

「ひどかったよ」。それでね、恭也の本音が聞けた時に、恭也には私が必要だな、って思った。私があの時、恭也に助けられたように、私が恭也を助けなくちゃって

佳保を引き寄せて俺は言った。

「ありがとう、佳保のおかげで俺は救われた」

「うん。それでね、恭也がここに来てくれるようになつてからは本当に楽しくて、どんどん恭也に惹かれていつたんだ。恭也が嫉妬してくれたこともあったでしょ？あの時は本当にうれしかった」

「ねえ、佳保」

「何？」

俺は佳保を抱きしめたまま聞いた。

「なんで、やめるの？」

「お父さんがね、倒れちゃつたから。私、一人娘だから。実家に帰ろうと思つて」

「そう、なんだ」

俺にはどうしようもできない問題だった。
何の力もない俺にはどうしようもなかつた。

でも、俺は佳保に言つことにした。

「俺、佳保と離れたくないから、頑張る。佳保の地元の大学受ける。

だから、俺、佳保と恋人になりたい」

佳保は俺の背中をポンポンと叩いた。

「嬉しいけど、地元の大学レベル高いよ？」

「努力する」

「それに、私、七つも上じやん」

「年上、いや、佳保以外考えられないから」

「……浮気しない？」

「するかよつ！」

「それじゃあ、恋人になつてあげる」

佳保は泣きながら笑っていた。

何だろつ、どうしようもなく愛おしい。

俺は佳保の頬を触った。

すべすべしてとても気持ちがよかつた。

「佳保

「うん

俺は自分から佳保にキスをした。

たぶん、これが俺の新しい始まり、だと思う。

(後書き)

感想、ご指摘、意見を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5034t/>

愛し愛され、救われて。

2011年5月23日18時55分発行